

## 5 専門的機関のないことによるマイナス

このように、市川の文学顕彰は、図書館、文化関係部署、読書サークル、市民団体などによって、広く豊かな展開を見せてはきたが、それらを体系的に把握する動きには至らなかった。また資料を専門に扱う機関がなかったことから、著名作家から貴重な資料の寄贈の打診があったにも関わらず、対応しきれなかった苦い経験も、いく度が見られた。

## 6 市民と行政の協働による文学顕彰

市川市では、文化振興を従来の教育行政の枠にとらわれず、より広い視野に立って展開させようと、1999年（平成11）から、文化行政を担当する部署が市長部局に移され、2002年（平成14）からは文化部が設けられた。

こうしたなか、市民主体に市川の文化人を顕彰しようという動きが見られ、1999年（平成11）には、行政が後押しをする形で、「第1回市川の文化人展 宗左近展」が開催された。

2000年（平成12）には、千年紀を契機に、市川市の芸術文化の魅力を市の内外にアピールし、活力あふれる芸術文化都市づくりを目指した方向性を打ち出す事業として、「市川2000年文化振興事業」が生まれ、「市川手児奈文学賞」創設、「市川の文芸風土シンポジウム」開催などが行われた。

以降、「市川の文化人展」では、永井荷風氏、小島貞二氏などを取り上げ、遺族との信頼関係を築くことができた。

2000年にはまた、第1回の「水木洋子の世界展」が開催され、翌年から、市民サポーターによる水木資料の整理が始められた。2003年（平成15）には、水木洋子氏の死去に伴い、財産の一切が市川市に寄贈され、市民サポーターと協働による資料整理と水木邸公開事業などが、一段と展開を見せた。

2002年（平成14）には、手児奈文学賞創設をきっかけに、市川市短歌協会が再組織された。

2002年度（平成14）には、「市川市文化振興ビジョン」が策定され、「街かどミュージアム都市構想」が提示された。

2004年（平成16）には、井上ひさし氏が、（財）市川市文化振興財団理事長に就任し、水木洋子シナリオ賞が設けられるなど、文学顕彰の機運が、さらに高まった。

また、市川市が顕彰する市川市名誉市民には、麻生磯次氏、小島貞二氏、永井荷風氏、水木洋子氏、宗左近氏など、文学者も多く含まれている。

こうして、市民と行政の協働による文学顕彰の機会が、目に見えて活発になり、市川の文芸風土を貴重な共有資産であると認識し、継承していこうとする市民意識が高まってきた。